

大草谷津田いきもの里 自然観察会 里山の暮らし再発見

佐野由輝（大網白里市）

日 時：2013年11月3日（日）10：30～12：00 天候：曇り

参加者：6名（大人5名）

担当指導員：佐野由輝、岡田敬子

まずはじめに、駐車場そばに設置してある総合案内板の空中写真(昭和23年及び平成7年)を見比べてもらうとともに、世界農林業センサスの千葉市の土地利用形態の変遷のデータを示し、大草谷津田いきもの里がどのように利用されてきたかを確認しました。その結果、大草の斜面林は、かつてはアカマツを中心とした雑木林、台地は地名(山畑、下の畑)にも残っているとおり、畑、一部を除き休耕田となっている谷津は田んぼとして利用されていたことが分かりました。そして、空中写真で箇所が、どのように変化しているかを現地に行って観察しました。まずは、竹林です。今でこそ、邪魔者扱いされていますが、昔は重宝しており、筍は食料、竹の根元の皮はおにぎり包み、葉は茶、生薬、堆肥、棹は建材、竹垣、楽器、食器、日用品、根(地下茎)は印鑑、水指に利用されていました。実は、探してみれば、今もいろんな道具の材料として使われおり、百円ショップで確認したところ、定規、箸、筴等30種類以上竹商品が並んでいました(中国製ですが)。竹冠の漢字が100以上あることから、いかに竹が身近な木であったかということが窺えます。残念ながら、最近では、放置された竹林が拡大して問題となっていますが、一方で、竹炭、竹酢液、竹繊維、木質バイオマス等新たな利用方法が模索されています。

続いて、スギ林に移動しました。スギも竹同様、建築材、樽、桶、線香、電柱等、昔はいろんな用途に使われていました。今は、手入れ不足のスギ林が増加するとともに、花粉症という問題も生じています。最近では、エコ商品としての木製品に対する評価が高まっています。

次に、谷津田に移動しました。樹枝状に入り組んだ谷地形を田んぼとして利用した谷津田は千葉県によく見られる原風景で、千葉県全体では谷(ヤツ)という地名が2万以上あるそうです。昔は、利水や肥料の採取などの面で便利だから谷津田が広がっていたのですが、機械化が進み、大規模圃場や人工的な用排水路ができるとかえって谷津田が不便となり、休耕田が増加するようになりました。最近では、水生生物の生息場所や生物多様性保全の観点から田んぼが見直されています。田んぼの畦道を歩きながら、はざかけの様子や林縁部分を彩るガマズミ、ムラサキシキブなどの実に癒やされました。

さらに、広葉樹の雑木林に移動し、下畑で炭焼きの跡を見学しました。燃料革命以前は、薪や炭として定期的に雑木林が伐採されていたものと考えられます。しかし、今では定期的な伐採が行われなくなったため、大径木化した広葉樹が増えるようになりました。広葉樹の雑木林とスギ人工林のちょうど境目に一列にイヌシデが並んで植えられている箇所があります。これは、土地の所有者が異なる場合に、境界の目印として植えられたものです。

このように、大草谷津田いきもの里には、狭い範囲に、竹林、林齢の異なるスギ・ヒノキ人工林、谷津田、広葉樹林等さまざまな状態の景観が、入り組んでいます。これは、人が自然にどのように関わってきたかの結果の姿であることを説明し、里山の景観を維持するためには人が適切な管理を継続的に行うことが大切であり、そのことが、結果的に生物多様性の保全にも綱が手いることを説明し、観察会を終えました。

